

# 西野剛志さん

## 株式会社関電工

営業統轄本部品質工事管理部品質工事管理チーム主任  
兼検査チーム

にしのみ・たけし ●1967(昭和42)年徳島県生まれ。昭和61年徳島県立徳島東工業高校電気科卒業後、(株)関電工入社、営業開発本部内線部西部支社配属。平成元年(社)東京電業協会主催第22回電気工事士技能競技大会で関東通商産業局長賞最優秀賞受賞。平成7年東京都青年優秀技能者賞受賞。平成21年東京都優秀技能者(東京マイスター)知事賞の認定を受ける。第三種電気主任技術者、登録電気工事基幹技能者、第一種電気工事士、高圧電気工事技術者、1級電気工事施工管理技士。



技能を継承していくことの難しさ

西野さんは工業高校の電気科の時に電気工事士、高圧電気工事技術者等の資格を取得し、漠然と電気関係の仕事に就きたいと考えていました。デスクワークや営業的な仕事よりも自分で体を動かしたのを作ったりするほうがいいと思っていました。

子どもの頃から電池を使った理科の実験などは楽しかったし、「高校の普通科へ行つて大学行つて」というよりは技術・技能を身につけて、自分で動いてする仕事をしたかったですね。高校で学んだ知識や資格を活かせる場だと思いい、上京して関電工に入社しました。

入社後に基礎研修と現場実習をしてから最初に配属されたのは、新宿地域中心の西部支社でした。その後中央区を管轄している中央支社に20年ほど勤務し、マリオンビルや東京會館ビルなどの電気工事を手がけました。初めて一人で全部やったのは銀座4丁目の交差点にある交番でした。

今は本社営業統轄本部の品質工事管理部で、全店の屋内線工事(ビルや工場などの電気工事)、海外工事の品質管理や技術指導(現場をパトロールし、一定の品質で施工されているかをチェックする)、また新入社員から初級・中級・上級の技能レベルアップ講習の講師や技能五輪選手の育成、その他技能講習の講師等の仕事をしています。

支社にいる頃は、ビルの新築工事およびテナントの電気設備の入れ替えや、受変電機器の取り替えなどのリニューアル工事が日常業務でした。リニューアルの電気工事というのは、テナントが業務しているビルなどで電気を止めて行つので、夜間や土日、お盆、正月など、業務をしていない時間や時期に集中して作業します。例えば、停電できる時間が夜の5時間などと限られているので、その時間内に作業を終えなくてはならない。そこで、作業に向けて入念に準備しておきます。私はリニューアルの現場が長かったので、土日が休めないことは家族も理解してくれました。

西野さんは、平成元年に電気工事士技能競技大会に出場し、優勝(関東通商産業局長賞最優秀賞受賞)。それがきっかけで技能に対する姿勢も変化しました。

会社での研修カリキュラムは、いわば身につけるべき最低ラインの技能。あとは仕事の現場で学んで研鑽していくわけですが、私の場合、技能競技大会の出場者には選ばれたことがきっかけとなつて、モノづくりに取り組み気持ち、考えが変わつたと思います。現場で常に、「よりきれいに、より早く、よりいいものを」という意識で作業するようになりました。

大会に参加してきた先輩が周りにいて、お手本になり、教えていただけ

ことも幸せでした。出場者は同年代の人の中から選ばれるので、切磋琢磨することになりますし、大会前は土日出勤や残業で一先懸命練習しました。

技能を身につけることは必要ですが、電気工事の現場は共同作業であり、「コミュニケーションが大切だと言います。

建物の新築、改築というのは、一人の力だけではできない仕事です。現場には大工、鉄筋工、配管工等、他職の職人さんたちがたくさんいます。事前の段取りで順番がうまく決まらないと時間が少なくなつてしまい、工期が守れなくなる恐れもあります。「コミュニケーション、人間同士の和がないと自分の技能が活かせないし、いい仕事ができないんです。いい環境を作るためにはいい人間関係を作らないとダメだということ」です。

技能もちろん重要ですが、現場ではやはりコミュニケーションが最も大事なのではないでしょうか。電気工事の仕事において思い通りのものを作るためには、人の協力が必要です。

実は、私はわりと人見知りするタイプなので、現場に入つて責任ある立場で仕事を進めていかななくてはならなくなつた時に、他職の職人さんや責任者の方々とコミュニケーションをとるのに苦労しました。技能と技術を身につけてきたつもりなので、いろいろな状



特別高圧受変電設備使用前自主検査(耐圧試験):施設の使用開始前に受変電設備が性能通りであるかどうかを高い電圧をかけて確認する。(上下とも)



23歳の時、(社)東京電業協会主催第22回電気工事士技能競技大会で関東通商産業局長賞最優秀賞を受賞(平成元年)



同大会で課題に取り組む西野さん▶



況に対応できるという気持ちはありませんでしたが、それを現場で活かすために、きちんと意思表示をして電気工事に必要な時間を取り、他職と工程を調整することに苦労した経験があります。

関電士でも全体的に、いかに「技能の継承」をしていくかという課題に取り組んでいます。西野さんは、技能の指導をする場面で、若い人にいかに教え、わかってもらい、後の世代につなげていくことができるかを考えています。

自分が学んできた頃と今とでは、やはり違うんですね。昔は先輩がやっているのを見て、説明されなくても学んでいたと思うのですが、最近の若い人は言葉で教えないと理解しない。本当の技術・技能というのは言葉で表現できない部分もあるので、その辺をうまく伝えるのが難しいです。

また、指示されないと動かなかつたり、先輩のやっているのを見て自分

でこつしよつと考える。現場で1日何もしなくても平気だったりする。時代が変わっていますね。

社内では技能競技大会があり、私も内線部門の審査をやっています。関電工は技能五輪にも参加していて、若い人の指導・育成等で今後もサポートしていきたいと思っています。

ただ、技能を継承することが難しくなっていることは確かだと感じますね。

工期が短縮されているうえ、誰でも早く施工できるように材料に工夫がなされているなど、電気知識がなくても組み立てられるというものが多くなってきました。技がなくてもできてしまつし、現代の利益重視の現場ではなかなか難しい。そういう意味では、技能を伝達しづらくなっています。

技能競技大会の課題などは、現場で実際には必要とされない、いわば無駄なこと多いんですが、そういう基礎的な技能を身につけていないと今後につなげていかなければいけません。

今、私が入社した頃の方が作ったピルの電気設備を入れ替える時期に差し掛かっているんですが、それら昭和の電気設備を見ると、現在のわれわれができないくらいきれいな施工をしているものが多い。そういうものを継承して残していかないとよい部分が途絶えてしまつのではないか。

他の業種でもそうだと思いますね。NC旋盤などもコンピュータでできてしまつ。技能がなかなか伝達されていかない、現場で教育ができない、と。

これまでも「電気は大切なものだ」という意識で仕事に取り組んできましたが、今回の震災の影響で電気が不足する状況が身近に起こり、一層いいものを提供しなければならぬという気持ちが強くなったと西野さんは話します。

「電気」は人の生活になくってはならないもの、生きていくために必要なものです。そのライフラインを守っている自負がありますし、高品質の電気を安全に供給するという仕事に誇りをもっています。

電気設備の仕事のやりがいは、自分のやったことの成果が見えることです。電気を送って、電気がパツと点いた瞬間は目に見えるわけですから、嬉しい。あるいは、変圧器に電気を通した瞬間にポーンと音がする。その瞬間が嬉しいんです。それが楽しくてやっている人も多いのではないですかね。

また、大工、鉄筋工、配管工等、他職の人は工事の一部を担当するので、自分たちの仕事が終われば現場からいなくなりません。電気設備は、工事の最初から最後までいるので、建物の完成が見られるんです。完成したのを見ると、やはりすごく達成感、充実感が得られますね。